空間・社会・地理思想 11号, 90-91頁, 2007年
Space, Society and Geographical Thought

ロバート・D・サック『人間の領域性—その理論と歴史』部分翻訳にあたって

山﨑 孝史 *

Takashi YAMAZAKI
Foreword for the Partial Translation of Robert D. Sack's
Human Territoriality: Its Theory and History

地理学が政治という事象にどう関わりうるかというテーマは，学術的な争点以前に，歴史的な要請であり，事実であった。つまり，ルネッサンスに続く大航海時代，新大陸の探検と開拓，ヨーロッパによる新旧大陸の植民地化，そして 20 世紀に入ってからの世界大戦の時代は，いずれも地理的知識，地図学的技術，そして地政学が重要な役割を果たした。しかし，地理学と植民地主義そして戦争との関わりの帰結は，20 世紀後半において地理学を政治から乖離させる方向に作用した。同時に，人間が自らの意図に沿って空間を生産・改変してきたという歴史的事実すら忘却させた。そこからは，人間が空間に関与し，それを制御しようとする恣意を超えた，何らかの客観的法則によって，人文事象の空間的パターンが説明されうるという態度が生まれた。

戦後の英語圏地理学史においてロバート・D・サックの名が知られるのは，このような空間分析のパラダイムへの批判者としてである。彼は，1960 年代から展開される空間分析批判の諸潮流の中で，空間分析の理論的視座に立脚しながら，「空間分離主義」を批判した（Sack　1974）。空間分離主義とは，物体や事象の存在に関する理論から独立して，その空間的属性（例えば距離の効果）だけを理論化できるとする態度であり，当時の空間分析の主たる認識論的立場であった。サックは，物体や事象の属性は，その空間的・時間的属性と不可分の関係にあり，空間的属性のみを分離して説明することが，理論的に不可能であると主張した。

サックはその後，人間が歴史的にいかに空間を制御し，その意図に沿って組織や社会を構築したかを明らかにする研究を進め，その成果を『人間の領域性』（Sack 1986）に結実させた。人間の領域性とは，サックの言葉を借りれば，「地理的区域を画定し，そこへのコントロールを主張することによって，人々，諸現象，諸関係に影響を及ぼし，それらをコントロールしようとする個人または集団による試み」（Sack 1986: 19）である。こうした人間の領域的行動とは，単なる動物行動学のアナロジーによって理解されるのではなく，人間が生存のために空間を制御し，組織を形成し，権力を行使する歴史的過程として確認される。サックは，カトリック教会の発生と展開，アメリカへのヨーロッパ人入植と領域的システムの発展，職場における空間的コントロールと組織的ヒエラルキーの深化といった歴史的事例をもとに，人間の領域性の種々の傾向と効果を実証する。そこで，彼が見出したのは，近代資本主義社会においてこそ，人間の領域性が最も強力に発揮されるということであった。その意味で，人間の領域性は近

* 大阪市立大学

代性（モダニティ）の重要な一側面なのである。

サックの所論は，画定された空間（領域）を権力やコントロールの基礎とする社会事象を説明するのに有効であり，領土や行政区画など政治領域の問題を具体的に考える上で不可欠である。*Progress in Human Geography* 誌は 2000 年に本書を古典として評価する記事を掲載しているが，コメンタリーを寄せたのは John Agnew と Anssi Paasi という政治地理学者であった（Progress in Human Geography 2000）。『人間の領域性』が公刊された 1980 年代は，英語圏における政治地理学の理論的展開において重要な時期である。ピーター･テイラーが 1970 年代のウォーラーステインの世界システム論に立脚した政治地理学の理論的視角を確立し（Taylor 1985），ロバート・ジョンストンらが選挙地理学研究を精緻化させ（Johnston, et al. 1990），そしてジョン・アグニューが構造化理論を政治地理学的な場所論に援用した（Agnew 1987）のは，全て 1980 年代である。『人間の領域性』は，これら著作と並んで 1980 年代以降の英語圏政治地理学の発展に対して非常に重要な理論的貢献をなした。その意味で『人間の領域性』は政治地理学を志す者にとっては必読書である。

しかし，残念なことに，サックによる領域性研究の価値は，日本の地理学ではごく一部の研究（上田 1986, 1989, 堀 1995, Yamazaki 2002 など）を除き看過されており，日本での実証研究にはほとんど適用されていない。これは『人間の領域性』の論述がしばしば難解であることや，その政治地理的価値を摂取できる下位分野が日本で未発達であることなどが理由であろう。しかし，今日，グローバル化と領域の変容，すなわち国家領土の変質や脱領域化・再領域化といった現象をめぐる議論の出発点として，領域性を理解することは重要である（山﨑 2001, Yamazaki 2002, 森川 2006）。また，よりミクロなレベルでは，安全・安心のまちづくりとして，防犯をめぐる地域社会の「領域性」が話題になっている（小宮 2005）。『人間の領域性』は，そうしたこれからの研究への一つの洞察を与えると期待できる。

以下では，領域性の理論的側面を領域性の傾向とその組み合わせから説明した第 2 章，カトリック教会の組織編成とアメリカへの入植過程を例に，領域性の歴史的展開を詳述した第 4 章と第 5 章を訳出する。この三つの章を通して，サックが歴史的事例から領域性のどのような傾向を抽出し一般化しているかを知ることができるであろう。

最後に，『人間の領域性』の部分翻訳にあたってはサック氏自身ならびに Cambridge University Press 社より翻訳許可を得た。日本語訳に際しては，第 2 章を山﨑が，第 4 章と第 5 章をそれぞれ大阪市立大学大学院文学研究科院生である林修平氏と田中靖記氏が担当し，山﨑が監訳するという形をとった。したがって，訳出に際しての不備の責任はひとえに監訳者にあることを申し添えておきたい。尚，翻訳許可の取得に際しては，平成 18～20 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「グローバル化時代における公共空間と場所アイデンティティの再編成に関する研究」（研究代表者高木明彦九州大学教授）からの助成を受けた。

参考文献

上田元 1986. 領域性概念と帰属意識－諸概念の検討とそのメタ地理学的反省． 人文地理 38-3, pp. 1-19

上田元 1989. 習志野市における住民参加の制度とその領域性． 地理学評論 62A-6, 417-437.

小宮信夫 2005. 犯罪は「この場所」で起こる．光文社.

堀健彦 1995. 八・九世紀伊勢神郡の再編成過程と領域性－その歴史地理学的試論．史林 78-1, pp. 97-137.

森川洋 2006. テリトリーおよびテリトリー性と地域的アイデンティティに関する研究． 人文地理 58-2, pp. 21-41.

山﨑孝史 2001. グローバル化時代における国民国家とナショナリズム－英語圏の研究動向から． 地理学評論 74-9, pp. 512－533.

Agnew, J. A. 1987. *Place and politics: the geographical mediation of state and society*. Allen & Unwin.

Johnston, R. J., Shelly, F. M., and Taylor, P. J. eds. 1990. *Developments in electoral geography*. Routledge.

Progress in Human Geography 2000. Classics in human geography revisited. *Progress in Human Geography* 24-1, pp. 91-99.

Sack, R. D. 1974. The spatial separatist theme in geography. *Economic Geography* 50, pp. 1-19.

Sack, R.D. 1986. *Human territoriality: its theory and history*. Cambridge University Press.

Taylor, P. J. 1985. *Political geography: world economy, nation-state, and locality*. Longman.

Yamazaki, T. 2002. Is Japan Leaking? globalisation, reterritorialisation and identity in the Asia-Pacific context. *Geopolitics* 7-1, pp. 165-192.